

# 日本の E/LE 教育における ラーニング・ポートフォリオの活用<sup>0)</sup>

江 澤 照 美

## 1. 序

外国語教育におけるポートフォリオは、学習者が習得した言語やその言語圏の文化に関する知識および経験、あるいは学習後の省察について書きとめて保存しておく個人的な文書記録である。近年日本でも注目され始め、その導入例や実践報告はネットによる探索でも容易に見いだせるようになった。

外国語教育に限らず日本の高等教育の諸分野で今後の活用と普及のための研究が進んでいるのは、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどの高等教育機関で導入されているポートフォリオである。ポートフォリオについてその歴史や普及に至るまでの経緯についての理解を深めるには国内でポートフォリオ研究の第一人者と言える土持ゲーリー法一氏による一連の紹介本<sup>1)</sup>が参考になる。一般に教育分野でポートフォリオと呼ばれるものは三種類ある。教師のためのティーチング・ポートフォリオ、学習者のためのラーニング・ポートフォリオ、そして大学教員の教育・研究・社会貢献の記録として活用されるアカデミック・ポートフォリオである。本稿ではその三種類のポートフォリオのうち、特に自律学習や生涯学習をサポートする教育ツールとしてその評価が高まりつつあるラーニング・ポートフォリオを主な考察の対象とする。

筆者が知らないだけで、日本のどこかですでに導入の前例があるかもしれないが、日本の E/LE 教育界全体としてはラーニング・ポートフォリオが十分に普及しているとは言えないのが現状である。よって、ポートフォリオ導入を検討する場合、必然的に他言語での導入例を探すことになる。ただし、スペイン語についてはヨーロッパでのポートフォリオ活用事情をも知る必要がある。共通参照枠策定後のヨーロッパではヨーロッパ言語ポートフォリオ (Portfolio Europeo de las Lenguas<sup>2)</sup>、以後 PEL と略す) が

浸透しつつある。PELはヨーロッパ評議会が共通参照枠と共にその利用を積極的に推進し、その結果スペインの教育事情に合わせた文脈化が進んでいる。PELもラーニング・ポートフォリオの一種であるが、後述するようにアメリカ、カナダのそれと完全に同一のものとしてとらえてはならない。

本稿の目的は日本国内のE/LE教育においてラーニング・ポートフォリオを導入する際に留意すべき点を認識することにある。そのために、まずポートフォリオ導入の先行事例が豊富なアメリカやカナダ、そしてヨーロッパのPELについてその普及状況を俯瞰する。さらに、スペイン語以外の言語学習でのラーニング・ポートフォリオの例や学習者の報告例に見いだされる問題点への考察も加えながら、諸外国の先行例をどの程度参考にしうるものなのかを見極めたい。なお筆者自身はラーニング・ポートフォリオの導入を検討しているがいまだ実現していないので、本稿は実践報告ではないことをあらかじめお断りしておきたい。

## 2. ラーニング・ポートフォリオ

スペイン語の教育用語ではラーニング・ポートフォリオを *Portfolio del estudiante* (または *del alumno*)、ティーチング・ポートフォリオを *Portfolio del profesor* と呼ぶこともあるが、現在のヨーロッパでラーニング・ポートフォリオとして定着しているのはPELである。本章では、まずアメリカやカナダで普及しているラーニング・ポートフォリオについてその概略をたどる。

土持(2009)はポートフォリオ研究の権威者である John Zubizarreta の先行研究をもとに、大学におけるラーニング・ポートフォリオの役割や、日本で導入が遅れた事情、構成や実践例などを詳細に紹介している<sup>3)</sup>。特に将来導入を考える教師が必ず理解しておく必要があるのはポートフォリオの基本的な構成である。ラーニング・ポートフォリオを構成する要素は Zubizarreta によると、①学習哲学 ②学習達成度 ③学習証拠 ④学習アセスメント ⑤学習関連事項 ⑥学習目標 ⑦付録であり、リフレクション(省察)・ドキュメンテーション(証拠資料)・コラボレーション(共同作業)の三つの領域において提示されるものである<sup>4)</sup>。

さらに、ラーニング・ポートフォリオに欠かせない三つの側面として  
・自身の情報—省察的叙述、学習目標到達、キャリアプラン

- ・他者からの情報—教職員からのフィードバックおよび評価、推薦状、アドバイザーからの書面、学問上の賞状、奨学金、学士課程での研究資金
- ・学習成果—サンプル、ポートフォリオのための業績がある<sup>5)</sup>。

この三つの側面は、後述する PEL を構成する三要素（言語パスポート、バイオグラフィー（＝言語学習記録）、資料集）に重ね合わせることができる。三要素のうち教師の立場から特にその内容構成に留意すべきなのは学習者の評価に関わるバイオグラフィーである。

学習者の立場から述べれば、ポートフォリオを書くことは授業のふりかえりを定期的におこなうことであり、また自分が受けた授業そのものや授業中や授業外で実施した活動記録、あるいはその感想をまとめるという活動を継続して行うことになる。さらに、自分が間違いなくその勉強や活動をしたという証拠となるものを資料として保存することも忘れてはならない。評価を受ける際に教師から活動の証拠として提出を求められる可能性があるためである。また資料はのちに活動をふりかえるのにも役立つ。

ラーニング・ポートフォリオは学習者の自律的な学習を促すツールであるが、その学習記録により学習者自身の評価も可能となる。土持（2009）にはポートフォリオを課題化した例<sup>6)</sup>の他、採点指針（ルーブリック）の図表例も紹介されている<sup>7)</sup>。ルーブリックは現在の日本の教育界ではまだ十分に認知・活用ともされていないが、日本の大学において従来採点基準が必ずしも学生に対して明確に示されなかった風潮が近年是正されつつあることを考えると、成績評価をおこなう前に授業担当者がルーブリックを受講生に提示するというスタイルもいずれは普及することが予想される。土持氏の一連の著作はポートフォリオのみならずルーブリックもその実例と共に紹介し、評価基準を明示的にするとは具体的にどういう情報を学生に提示することになるのかをわかりやすく例示したという点で高く評価できる。

二一世紀の教育を語る場合、ICT の活用はもはや必要不可欠であるが、紙媒体のポートフォリオだけでなく、電子ポートフォリオ（e-Portfolio）も今後の普及が予想される。ウェブサイトを通じて教師が課題を出し、受講生が電子ポートフォリオの形で提出する、受講生同士が作成したポートフォリオを公開する、あるいは意見交換する、など電子ポートフォリオの

利用は紙媒体では十分になしえなかった教育活動を可能にする。土持(2009: 182-183)によると、電子ポートフォリオはアメリカの多くの大学で導入されていて、就職活動にも積極的に活用されているが、技術的な側面のみが強調され過ぎ、学習プロセスの省察的实践に欠けるとの批判もあるとのことである。今後ポートフォリオを導入する予定の教師にとっては、電子ポートフォリオの利便性に気を取られすぎると、ポートフォリオの基本である省察がおろそかになる可能性があるという警告として受け止めるべきであろう。

日本でも ICT を活用した授業を実施している大学、授業、教育者は年々増えているが、まだ多数派と呼べる状況ではない。しかし、たとえば教育機関のウェブページ開設やシラバスの電子化などは現在の日本の大学でもかなり普及してきたことを考えれば、今後ラーニング・ポートフォリオが普及する場合には電子ポートフォリオとしての利用の増加と連動することが予想される。どのような形態の授業でもその中身の充実が必要不可欠であるのは言うまでもないが、ICTの利用により教室外での学習時間を増やす工夫の可能性が増えるのは歓迎すべきことである<sup>8)</sup>。

### 3. PEL<sup>9)</sup>

境(2007: 21)によると、PELは共通参照枠の中にはほとんど記述がないが、表裏一体をなすものであり、共通参照枠に盛り込まれた理念を現実のものとするためのきわめて重要な手段である。

PELは言語パスポート(Pasaporte lingüístico)、バイオグラフィー(Biografía)、資料集(Dossier)の三部構成で、ヨーロッパ評議会が開発したもの以外にもちにヨーロッパ評議会により認定されたものが数多く存在する<sup>10)</sup>。

前章のアメリカ・カナダで普及しているラーニング・ポートフォリオとは共通する内容を持つが、まったく同一のものと考えるべきではない。母語以外に最低二言語を習得することが求められるヨーロッパの共同体構成員は、国境を越え共同体内の他の国への移住や就職も以前より簡単に実現できるが、それゆえに言語能力について記載した言語パスポートは就職希望者の言語能力について雇用者に判断材料を提供する役目を果たす。前章でアメリカの大学生が作成する電子ポートフォリオも就職活動に利用可能

であることに言及したが、複言語主義や複文化主義に裏打ちされる PEL の場合、言語パスポートに学習者自身が記載した言語学習歴や取得した資格などは就職活動という一時的なイベントのみならず、学習者がより長い間意識し続けるべきものである。

しかしながら、PEL でより重要なのは長期間継続して記録していく必要があるバイオグラフィーであると考えられている。バイオグラフィーは言語習得が進むたびに学習者が自己評価を行うことができる仕組みを備えていて、その自己評価チェックリストの一部は各技能について参照レベルの例示的能力記述文によって定義づけがされている。また、異文化対応能力など参照レベルで評価しにくい分野のチェックリストは別の形式を持つ。いずれの場合でも、学習を続け、レベルが上がるたびに PEL のバイオグラフィーで自己評価するという方法を学習者がとり続けることがヨーロッパ評議会の推奨する生涯学習へとつながる。

このような PEL は小木曾 (2005: 54) によると、学習記録部分については報告的機能 (reporting function)、複言語主義や複文化主義を促進し、自律学習者を育成する部分については教育的機能 (pedagogical function) を持つとされていて、ヨーロッパ評議会が認定する PEL はこの二つの機能を兼ね備える必要があるとされている。

PEL の導入は教師側からは概ね好評であるが、いくつかの課題もあり、学習者が自己評価を適切にできない、教師と学習者の評価に差が出てくるなどの問題が生じる場合がある。また、成績評価や就職活動において PEL が利用される場合に所有者の自己評価はどのように位置づけられるのか必ずしも明確に示されないのも問題であるとされている<sup>11)</sup>。学習者は教師と異なり、評価することに不慣れであるため、適切な評価の方法やその意義を理解させる必要がある。

#### 4. スペインにおける PEL の活用

ヨーロッパ評議会が PEL のモデルを完成し、その後ヨーロッパ共同体各国の言語教育制度に沿った文脈化を各国に要請し、それに応じた国々によって改良された各国版 PEL がさらにヨーロッパ協議会によって認定され、PEL 自体の発展へとつながっていく。この一連の動きは、ヨーロッパ評議会が共通参照枠を策定したのち、各国の言語版で共通参照枠に準拠す

る言語教育や学習の指導要綱を開発要請したものと重なる。スペイン語の場合、スペインのセルバンテス協会が主導し、共通参照枠をもとに従来のカリキュラムプランの内容を大幅に刷新した新しいカリキュラムプラン(Plan Curricular)を開発した。

PEL についても同様に、スペインは比較的早い対応を試みている。2003年に各地方語の専門家により4つのモデルが発表され、のちにそれが改良されて、(1)3歳から7歳 (2)8歳から12歳 (3)中等教育、職業養成、高等教育(12歳から18歳) (4)成人対象のPELが認定された。

このようにPELはスペイン国内での第二言語教育から導入が開始された。もちろん、E/LE教育にとってもPELの活用は概ね有効であると評価しているが、PELが自律学習支援や生涯学習に適した学習ツールであるがゆえに、長期にわたり言語学習を継続する必要がある学習者にとってより必要性が高いと考えられている。

E/LE教育のテキスト出版で知られるSGEL社が発行したE/LE教育関係専門誌*Carabela*の第60号は「ヨーロッパ言語ポートフォリオ(PEL)と外国語及び第二言語教育」というタイトルを掲げ2007年にPELの特集を組んでいる。*Carabela*はそれに先立つ2005年に57号と58号の2号にわたって共通参照枠の特集号を刊行している。スペイン国内で共通参照枠やポートフォリオへの関心が高まってきた時期と言えよう。*Carabela* 60号に収録された5本の記事のうち、Cassany(2007)、Landone(2007)、Cruz Piñol(2007)が電子ポートフォリオ<sup>12)</sup>に言及している。Martín Peris(2007)はスペインの中等教育課程における第二言語教育でのPELの活用例を挙げている。また、Bordón(2007)はPELのバイオグラフィーに収録されている自己評価チェックリストを利用した成人学習者の自己評価について実例つきでその有効性について検証している。

PELに関するスペイン政府筋の広報は教育・文化・スポーツ省のサイトにて行われている。*Carabela* 60号の発刊時にはCruz Piñol(2007: 102)が紹介したアドレスに置かれていたが、その後ヨーロッパ自律学習プログラム機構(OAPEE)のサイトに移行した。2012年10月現在、OAPEEのウェブページ内にあるポートフォリオに関するページによると

- (1) Mi primer Portfolio Europeo de las Lenguas  
…幼児・小学生低学年用(3～7歳)
- (2) Mi Portfolio Europeo de las Lenguas  
…小学生用(8～12歳)

(3) Portofolio Europeo de las Lenguas

…中学生、職業訓練課程、高校生用 (12~18歳)

(4) Portofolio Europeo de las Lenguas

…成人向け (16歳以上)

(5) Portofolio Europeo de las Lenguas Electrónico e-PEL

…14歳以上のユーザー向け

の五つの PEL のモデルがあるとのことである<sup>13)</sup>。PEL の年齢別分類はスペイン版 PEL に限ったものではなく、ヨーロッパ共同体域内の他の国の PEL も同様である。このように学習者の年代別に異なる PEL を開発することが重要とされている<sup>14)</sup>。

スペインの独自色を感じさせるのは、スペイン国内の地方語版も用意されているところである。(2) と (3) はスペイン語 (カスティーリャ語) の他、カタルーニャ語、バスク語、ガリシア語、バレンシア語の計 5 言語の版のモデルも PDF 版で用意されていて、地方語でのイメージ教育を推進中の地方語圏の初等・中等教育にも対応している。また、(5) の電子ポートフォリオについてはさらに解説があり、生涯学習を支援するツールとして利用が推奨されている。OAEPE のこのポートフォリオ関係のサイトでは電子ポートフォリオ作成のためのワークショップやプレゼンテーションの開催情報も掲載されていて、PEL の導入を試みる教育者や教育機関にとっての情報源となっている。

また、2004年12月にヨーロッパ議会とヨーロッパ評議会により公布されたユーロパス (el Europass) は、学業修了後ビジネスの世界で活用するために設定された個人の習得した資格や勉強経験などを記録するものであり、PEL と共に生涯学習を支援するツールとして普及している。ユーロパスについても OAEPE のウェブページにコンテンツが置かれている。Rosen y Varela (2009) はユーロパス、PEL、自己評価チェックリストを共通参照枠の理念を包括する有効なツールとして高く評価している<sup>15)</sup>。

以上、*Carabela* 60号の PEL 特集記事や OAEPE のコンテンツ検証は PEL の成り立ちや仕組みを理解する助けとなることがわかる。特にスペイン国内の第二言語学習者向けのツールとして PEL の利用環境が年々整備されていて、今後のさらなる展開も期待される。

さて、次にスペイン語の PEL が日本での E/LE 教育のラーニング・ポートフォリオ活用の参考になりうるかを検証したい。スペイン国内の E/LE 教育界による PEL への取り組みは、第二言語教育の世界と同様に進んで

いると考えられるであろうか。

E/LE テキスト出版社各社は、共通参照枠に準拠した E/LE 教育の浸透と共に従来のテキストの改訂新版や全くの新刊を参照レベル別に出版し始めた。そんな新刊テキストにはラーニング・ポートフォリオを付録として持つものもある。筆者が勤務する愛知県立大学スペイン語圏専攻の授業でネイティブ教員が使用している Difusión 社のテキスト *Gente* もそのひとつである。付録のポートフォリオは本の構成とは少し異なり、A1-A2-B1 でひとまとめにされた23ページからなる薄い冊子である。共通参照枠の他、スペイン教育・文化・スポーツ省編の中等教育用 PEL と言語パスポートに準拠している旨が巻末に記されている。

*Gente* の付録的 PEL には利用者の学習歴や資格試験の合格歴などを問う言語パスポートに相当する部分と、A1 から B1 までの五技能（聞く、読む、会話する、発信する、書く）について問うバイオグラフィーに相当する部分、そして資料集に相当する部分から構成され、PEL の体裁を保っている。バイオグラフィーについては、レベルごとに読み五技能において Can-do 文<sup>16)</sup>の形式で提示されたことがらができるようになったか省察をおこなわせる。また、資料集についてはテキストの各ユニットで指定された一つないしは二つのアクティビティの遂行によって得られるものを保存することが求められている。例を挙げると、*Gente* 1 のユニット 1 の 12 ではクラスメートの姓名、電話番号、メールアドレスのリスト作りが要求されている。

E/LE テキスト用のポートフォリオの内容は必然的にテキストの内容に連動する。このようなポートフォリオはテキストの補助教材としての利用が可能である。しかし、ラーニング・ポートフォリオの活用が、学習を時々ふりかえりながら継続するという学習者の姿勢と密接な関わりを持つならば、一冊で一つないしは二つの参照レベルの内容しか扱えない E/LE 教育テキストでは作成できるポートフォリオの質や量に限りがある。*Gente* の別冊ポートフォリオについては、*Gente* 1 と *Gente* 2 の二冊のテキストの内容をまとめることで A1 レベルから B1 レベルのふりかえりが可能となっている。近年刊行された E/LE 教育テキストでは例えば *Gente* と同じ Difusión 社から出版された *¡Nos vemos!* には Portfolio というマークのついた活動で資料集に保存可能なものを作成できるようにデザインされている。また、SGEL 社の *ELExprés* は各ユニットの最後に Can-do 形式でふりかえり用のチェックリストを設けている。PEL を意識した内容であること



がわかりやすいのは近年の、そしておそらく今後も続くであろう E/LE テキストの傾向と言えるだろう。

以上、スペインの第二言語及び E/LE 教育における PEL の活用の実情を述べた。共通参照枠の理念を受け継ぎ、スペイン語教育・学習・評価のための文脈化の集大成としてのカリキュラム・プランを完成したスペインは、共通参照枠と密接な関わりを持つ PEL についてもスペイン国内での導入や普及に向けての体制を確立しつつあり、特にそれは国内での第二言語教育において顕著である。

## 5. 日本の E/LE 教育へのラーニング・ポートフォリオの導入

日本国内でもすでにラーニング・ポートフォリオを活用している教育機関があるが、前章までに見てきたように、アメリカやカナダ、あるいはヨーロッパでのその活用の実情と比較してみると、日本ではまだラーニング・ポートフォリオの導入が十分に進んでいるとは言えないだろう。土持(2009)の活用例からもわかるように、ラーニング・ポートフォリオは言語教育のみならず様々な分野の教育に利用できるが、外国語教育に導入することで学習者の継続的な学習を支援する。そして、どちらかと言えば、ヨーロッパの PEL のような言語教育に適したポートフォリオの活用例を参考に、日本の教育事情に沿ったポートフォリオの開発が試みられるべきであろう。

他言語の例を引き合いに出すが、大木・西山・グラヅィアニ(2010)はまさしくその好例といえる別冊のポートフォリオ付きの初級フランス語文法テキストである。言語と文化の学習を通じて複言語能力や複文化能力を養うという目的のもと、テキストの中で扱われているフランス文化に関するコラムは大学生向き、すなわち成人の知的嗜好に沿った内容のものである。また、このテキストのセールスポイントの一つである別冊のポートフォリオは授業後の省察に役立てるため、課ごとに様々なタイプの問いかけが用意されている。どの課も最初の問いには復習を兼ねた自己分析のためのチェックリストが登場する。また、英語とフランス語学習についての学習者の考えや自律学習などの話題について選択肢から回答させたり、英語以外の外国語を学習する理由を書かせたりする二番目の問いは様々な内容のものが登場するが、いずれも学生に自分がフランス語を学習していること

を意識させ続けるような問いかけとなっている。

日本の E/LE 教育の世界では共通参照枠の研究がフランス語教育の世界ほどには進んでおらず、特に日本人教師が主として使用する教科書と内容を連動させたポートフォリオが付録としてついてくるようなテキストが出版されるのはまだ少し先のことであろう。しかしながら、ヨーロッパの PEL の理念が反映された大木・西山・グラツィアニ (2010) のポートフォリオやスペインの E/LE テキストでのポートフォリオの語要素の扱いなどを参考に、日本の E/LE 教育へのラーニング・ポートフォリオの導入や活用についてあらためて考えてみたい。

まず、E/LE 教育での利用という観点から見ると、アメリカやカナダのラーニング・ポートフォリオより PEL のほうが参考になる点が圧倒的に多いのは確かである。アメリカやカナダでも語学教育でポートフォリオの活用が推進されているが、PEL は共通参照枠と関わりが深くスペインの教育制度下での文脈化がすでに進んでいる。このことから、日本での E/LE 教育においてラーニング・ポートフォリオ導入を図る際は PEL にヒントを得て研究を進める価値があると思われる。

しかし、共通参照枠を無批判に日本の外国語教育に取りこむことがきわめて難しいのと同様に、スペインの PEL もその内容をそのまま日本の E/LE 教育現場に持ち込むのは適切ではなく、PEL から何かを参考にすることも十分な検証をすべきであろう。本稿 3 章と 4 章で確認したように、PEL はヨーロッパの複言語主義、複文化主義を反映している。そして、日本でも外国語学習を通じて複言語、複文化主義的な考え方を養うことに筆者は賛同するが、ヨーロッパ、特に筆者が知っているスペインにおける複言語、複文化主義のあり方と日本のそれはやはり同質のものとは思えず、共通参照枠を日本の外国語教育の中で文脈化する必要があるのと同様に、PEL の文脈化も必要である。

PEL は自律学習を助け、生涯学習を促す教育ツールである。それゆえに年齢別の PEL の細分化が重要と考えられていることを前章で述べた。日本の特に第二外国語学習者は大学で習った外国語をその後使う機会がなく、必修科目として単位取得した後も学習を続けるモチベーションを持たないケースが多いため、外国語学習を継続せずにやめてしまうことになる。こういう状況に置かれた学習者にラーニング・ポートフォリオを課し、全員ではなくても一部の学生に何らかの効果を与えることができれば理想的

であるが、実現の難しさが予測される。

日本では大半の学習者が英語以外の外国語の学習を大学入学以降に開始する。スペイン語も例外ではないので、初等教育および中等教育用 PEL についてはほとんど参考にならない。その代わり、大半の学習者が成人であるため、成人用 PEL については参考にすることができる。年少者向け PEL は基本的に学校側による管理が推奨されているが、成人向け PEL の管理は完全に学習者の自己管理とされている<sup>17)</sup>。大学でスペイン語を学んだ学生が卒業後も勉強を続けることができるような教育を現在の日本の大学や大学教員は求められているが、それゆえ成人の学習者が学習を継続できるようなラーニング・ポートフォリオの導入が目指されなければならない。

しかし、単に導入するだけでは必ずしも十分な効果が期待できない可能性もあるようだ。吉満 (2004) はドイツ語の授業の受講生に学習を促進するという目的で評価とは関わりのない「授業の記録」をつけさせ、学生が感想を書いた場合は可能な限りコメントするというフィードバックもおこなうという実践活動とその活動の効果について報告している。この「授業の記録」はポートフォリオの要素を持つが、学生に何らかの問題意識を持たせるような性格づけはされておらず、むしろ気軽に書かせるため、記録の活用は学生自身に任せてある。それでも学生が教師に向けて書いてきたことに教師が何らかのコメントを書くことやノートやテストの準備用の記録として残るものがあるというところに学生は何らかの満足感を抱くようである。以上のような吉満 (2004) の試みで、授業の記録は学生のドイツ語学習に役だったか、今後の授業でも導入してほしいかという二つの問いについては共に 80% を超す学生が「そう思う」と回答した。ところが、授業の記録をつけることでドイツ語学習に対する気持ちや姿勢に変化があったかという問いについては肯定的評価 32.40%、どちらでもない 67.50%、否定的評価 0% という結果が出た<sup>18)</sup>。否定的評価が皆無であったことに救いはあるが、学生に記録をさせても授業に関するあらゆることが必ずしも学生に好感を持って受け止められるわけではないという事実を前にして、学生に自律学習を促す活動の難しさを実感する。

その他、特に詳細は省くが、複数の先行研究でポートフォリオの作成を試みた学生の声を拾うべく吉満 (2004) と同様の授業のふりかえりを行ったものを読み、このような実践について学生側からは概ね肯定的な感想が

多いと感じられた。しかし、少数ではあるが出てくる学生の否定的な感想の中で、何のためにこれを書かされるのか意図がわからないという意見もある。したがって、ポートフォリオ導入の際はその効能について学生に事前に伝え理解を得る努力をしたほうがよいと思われる。

ところで、ポートフォリオの効能の一つである自律学習の促進についてはその方策を考える必要があるようだ。自律学習に慣れていない学習者は最初から自主的判斷で課題をこなすように勧めても戸惑うだけで、教師が期待するほど自主的に活動に参加してくれないことを筆者自身ここ数年来本務校で実施しているスペイン語多読活動で経験している。それで、筆者が講読の授業を担当しているスペイン語圏専攻二年生のクラスについて同じクラスを担当して下さっている非常勤の先生のご協力を得て、教室での講読とは別に課題として図書館所蔵のスペイン語多読教材を指定した以上のワード数分だけ読んで簡単なレポートを半年に一回提出することを評価の一部に加えることにした。すると、授業外の時間に図書館で行っているスペイン語多読活動にはほとんど姿を現すことのない学生たちの大半が、提出期限も定めた多読の課題を提出したのである。

筆者は学生の自律的な外国語学習支援の一環としてスペイン語の多読活動を開始したつもりで、強制的に課題を課すことは当初考えていなかった。しかし、自主的な活動にすると学生が積極的に参加せず、複数の学生に試しに意見を聞いてみたところ、全員が課題化したほうが良いという返事が返ってきて驚いた。そして、実際に多読の課題を課したところ、上記のような結果となった。

本稿序章で言及した日本のポートフォリオ研究第一人者の土持氏はポートフォリオを十二分に活用した授業を実践されているが、受講生にはポートフォリオ提出を義務づけている。受講生は図書館に置いてある指定図書を読まない授業に参加しにくいような仕組みになっている。さらにグループでの討論などの活動もあり、学生は教師の注意よりも同世代の学生の目のほうを気にするのでほとんどの学生は真面目に取り組むようになるとのことである<sup>19)</sup>。

以上のような自分の体験や土持氏のエピソードから考えるに、近年特に教室外での学習を学生に求める傾向があるが、自律に教室外で学習することに慣れていない学生にいきなりそれを求めてもうまくいかないようである。課題を課すということは一見自律学習の促進とは正反対の方向を目指

すように思えるが、ポートフォリオの導入を新規に始める場合、特に最初は学生に課題を与えて実行させる、活動を始める時期や範囲を設定しておくなどすることも必要になるかもしれない。日本人学生がまだ自律学習になじんでいないのか、あるいは今時の学生気質も彼らの行動に影響を及ぼしているのかははっきりとつかめていないが、学生に自律的学習を促しても必ずしも簡単に成功するとは限らないという可能性があるということである。

最後に、ラーニング・ポートフォリオにおいて重要な要素のひとつである自己評価について述べる。自律的学習と同じく、学習者がこれまでに自らを評価する機会をあまり持たなかった場合には、ラーニング・ポートフォリオの導入と共に自己評価を行うよう教師が求めても、学習者は確信を持ってそれを遂行できないと感じるだけであろう。しかし、ポートフォリオのバイオグラフィーには参照レベルで自分の理解力を自問する個所もあれば、参照レベルを使わずに判断する個所もある。評価にはいろいろな方法があり、段階的な尺度を用いる評価ばかりを常に用いるわけではない。多様な方法で物事の善し悪しや出来具合について評価をおこない、その過程で人々が意見を交換し、それにより人と人との交流も深まる。いろいろな意味で多様な人々のこのような交流こそ PEL が生み出されたヨーロッパで追究されたものであるが、文化や社会背景が異なる日本でもこのような人的交流は必要である。さらに言えば、適切な自己評価ができる人間は、学業を終え、職業を選択する時にも自分に適した職業を見つけ、さらに自己研鑽を重ねることで職業上の成功を勝ち取るであろう。適切な自己評価をすることはそれほど簡単ではないが、自己評価を何度も試みることでその評価能力もいつか高まるはずである。

## 6. 終わりに

筆者は共通参照枠についての知識を得てからしばらくして、PELを知った。しかし、共通参照枠について理解するだけでも時間を要し、PELの存在意義を正しく理解する余裕もなかった。日本のE/LE教育の世界はフランス語・ドイツ語教育の世界に比べて共通参照枠やそれに関連する分野の研究が少なく、依然として筆者が国内で参考文献とするものはスペイン語より他言語に関するもののほうが多いというのが現況である。共通参照枠

も PEL もそのまま日本に取り入れるのは難しいが、文脈化をはかることにより日本の E/LE 教育に応用が効くところが少なくないと今回の研究で確信を抱くに至った。

自己評価を定期的に行うことで学習へのモチベーションを維持し、教室で学ぶだけでなく、教室外でも学び続ける学習者の育成に役立つラーニング・ポートフォリオを自分の教室でも導入しようと教師が思い立った場合、どこにその模範を求めればよいか、どの程度参考になるのかを見極めるよう試みた。ポートフォリオは簡単に作成できる雛形のようなものが存在せず、教師の裁量で作成できる自由度の高いツールである。雛形はないが、作成のためのヒントは探せばあるということもわかった。次回このテーマで執筆するときはラーニング・ポートフォリオ導入の実践報告を行う所存である。

## 注

- 0) E/LE とは「外国語としてのスペイン語」(Español como Lengua Extranjera) の略称である。
- 1) 土持 (2007)、同 (2009)、同 (2011) を参照。
- 2) Cassany (2007: 5) によるとスペイン語表記としては一般に Portfolio と Portafolio のどちらも共存しているようである。
- 3) 土持 (2009) のうち特に第 8 章を参照。
- 4) 土持 (2009: 172-173) を参照。
- 5) 土持 (2009: 173) より引用。
- 6) 土持 (2009: 146-147) を参照。
- 7) 土持 (2009: 148) を参照。
- 8) 日本の大学での事例として、熊本大学の公開科目「基盤的教育論」を参照されたい。(→熊本大学の公開科目のアドレスを参照)
- 9) 序章で述べたように、ヨーロッパ言語ポートフォリオ (Portfolio Europeo de las Lenguas) の略記。英語では European Language Portfolio なので ELP と略される。
- 10) 小木曾 (2005: 52) を参照。この時点で認定された PEL は 70 以上とのことで、Cassany (2007: 11) にも同様の言及がある。そして OAPEE のサイトでは約 90 という数字が掲載されている。(2012年10月23日閲覧時)
- 11) 小木曾 (2005: 57-58) を参照。
- 12) El Portfolio digital と呼ばれる。

- 13) OAPEE のポートフォリオ関係のページのうち、El Portfolio en España を参照。 <http://www.oapee.es/oapee/inicio/iniciativas/portfolio/portfolio-esp.html>
- 14) 国際交流基金編 (2009: 77) を参照。なお、この文献は巻末に各章の執筆担当者が明記されているが、章内の執筆分担が不明の章がある。この IV 章もそのひとつである。
- 15) Rosen y Varela (2009: 67–69) および OAPEE のユーロパス関係のページを参照。
- 16) スペイン語では Puedo... で始まる文であるが、他の形式も若干ある。
- 17) 国際交流基金編 (2009: 80) を参照。
- 18) 吉満 (2004: 134) を参照。
- 19) 土持氏の授業と学生の自主的な活動については土持 (2007,2009,2011) にエピソードとして登場する。また筆者は同氏が講師をつとめたセミナーに参加した経験があり、そこでも同氏自身から同様の話を伺っている。

### 参考文献

- Bordón, Teresa (2007) “La autoevaluación de adultos por medio de los cuadros propuestos en el PEL” en *Carabela* 60, 73–98.
- Cassany, Daniel (2007) “Del portafolio al e-PEL” en *Carabela* 60, SGEL, 5–21.
- Cruz Piñol, Mar (2007) “«El Portfolio Europeo». Recursos en Internet para la elaboración de actividades” en *Carabela* 60, 99–108.
- 小木曾左枝子 (2005) 「1.4. ヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio: ELP)」ヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金『ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages』国際交流基金、52–62.
- 国際交流基金編 (2009) 『JF 日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金 (<http://jfstandard.jp/information/attachements/000003/trial04-2.pdf>)
- Landone, Elena (2007) “El uso en clase de un «Portfolio Europeo de las Lenguas» digital” en *Carabela* 60, 53–71.
- Martín Peris, Ernesto (2007) “El «Portfolio Europeo de las Lenguas» (o PEL) en la Enseñanza Secundaria en España” en *Carabela* 60, SGEL, 23–52.
- Mata, Eulàlia (2005) *Un portfolio europeo del español Gente Nueva edición*, 1–2, Difusión.
- 大木充、西山教行、グラズィアニ、ジャン＝フランソワ (2010) 『グラメール アクティブー文法で複言語・複文化ー』 (“La Grammaire Active du Français”)、朝日出版社
- Rosen, E. y R. Varela (2009) *Claves para comprender el Marco común europeo*,

enClave-ELE.

境一三 (2007) 「学術フロンティア推進事業「行動中心複言語学習プロジェクト」の課題と今後の活動について— CEFR をモデルとした言語教育政策の研究を中心に—」『慶應義塾外国語教育研究』第4号 慶應義塾大学外国語教育センター、1-30.

土持ゲーリー法一 (2007) 『ティーチング・ポートフォリオ 授業改善の秘訣』東信堂

——— (2009) 『ラーニング・ポートフォリオ 授業改善の秘訣』東信堂

——— (2011) 『ポートフォリオが日本の大学を変える ティーチング／ラーニング／アカデミック・ポートフォリオの活用』東信堂

吉満たか子 (2004) 「学習者による『授業の記録』導入の試み」板山真由美、森田昌美編『学習者中心の外国語教育をめざして 流通科学大学ドイツ語教授法ワークショップ論文集』三修社、122-136.

### 参考 URL アドレス

[http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/opencourses/pf/2Block/05/05-2\\_text.html](http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/opencourses/pf/2Block/05/05-2_text.html)

熊本大学公開科目「基盤的教育論」担当教員：鈴木克明、渡邊あや  
第5回 学習指導・評価論(3)「ポートフォリオとルーブリック」

<http://www.oapee.es/oapee/inicio/iniciativas/portfolio.html>

El Organismo Autónomo Programas Educativos Europeos (OAPPE) の Portfolio 関係のページ

<http://www.oapee.es/oapee/inicio/iniciativas/europass.html>

El Organismo Autónomo Programas Educativos Europeos (OAPPE) の Europass 関係のページ

### 参考教材

Lloret Ivorra, Eva María *et al.* (2010) *¡Nos vemos! 1*, Difusión.

Lorenzo, Mila y Nuria Sánchez (2006) *Un portfolio europeo del español Gente 1-2* Nueva edición, Difusión.

Martín Peris, Ernesto y Neus Sans Baulenas (2004) *Gente 1* Nueva edición, Difusión.

Pinilla, Raquel y Alicia San Mateo (2008) *ELExprés Curso intensivo de español A1-A2-B1*, SGEL.



## El uso del Portfolio de aprendizaje en la enseñanza del E/LE en Japón

Terumi EZAWA

El Portfolio de aprendizaje es un documento personal en el que los alumnos pueden registrar lo aprendido, sus experiencias de aprendizaje y reflexiones sobre ellas. Es una herramienta que sirve para fomentar el aprendizaje autónomo que ha generado interés entre los pedagogos de las universidades japonesas.

En este artículo tratamos diversos Portfolios de aprendizaje: el que se utiliza en Norteamérica y el PEL de Europa. Aquél está muy difundido con la rúbrica y éste ya tiene mejores versiones de cada países miembros de la UE. El PEL está muy relacionado con el MCER. Hemos investigado las ventajas y desventajas para aplicarlas en el aula de enseñanza del E/LE en Japón.

Nuestros alumnos no se acostumbran a la autoevaluación ni al aprendizaje autónomo, así que los profesores tienen que tomar medidas para que los alumnos hagan muchas reflexiones de su trabajo.